# 研究、論説、詩歌、随筆の小誌（未発表のもの）
# 『羔』（No.3）
# ――1933年1月――

1933年1月
小池辰雄

（内容）

「年の瀬に立ちて」
詩篇（3）（自由訳）
　第11篇　第12篇　第13篇　第14篇　第15篇
人生の厳粛事
「友の結婚を祝して」
「嬰児を天に送る」
「眠りなき夜のため」上巻（3）　ヒルティ
　12月1日　12月9日　12月10日　12月21日　12月31日
「星のたより」（3）　ロングフェロー
　（其4）「星辰の光」
　（其5）「更に高く」（エクセルシャー）　ロングフェロー
「樅の日記」（3）　小池政美
　1918年11月30日（土）
　1918年12月1日（日）　6日（金）　7日（土）　8日（日）　9日（月）　10日（火）
「先生去りて一年半の日に」
「雁が音」（1）
　DEPARTURE NEAR!（離別は近し）
　IN HIM.（彼にありて）
「希望」

＊

**【ピリピ書第3章7…21節】**

7 曩（さき）に我が益たりし事はキリストのために損と思うに至れり。

8 然り、我はわが主キリスト・イエスを知ることの優（すぐ）れたるために、凡（すべ）ての物を損なりと思い、彼のために既に凡ての物を損せしが、之を塵芥（あくた）のごとく思う。

**9これキリストを獲、……**
**10キリストとその復活の力とを知り、又その死に效いて彼の苦難にあずかり、**
**11如何にもして死人の中より甦えることを得んが為なり。……**
**12……キリストは之を得させんとて我を捉えたまえり。……**
**13……唯この一事を務む、即ち後のものを忘れ、前のものに向いて励み、…**
**20されど我らの国籍は天に在り、我らは主イエス・キリストの救主として其の処より来りたもうを待つ。**
**21彼は万物を己に服わせ得る能力によりて、我らの卑しき状の体を化えて、己が栄光の体に象らせ給わん。**

*

## 「年の瀬に立ちて」

もう除夜の鐘も鳴り止んだ。

戸を開けて何となき名残り惜しさに此の年最終の夜空に眼を以て呼びかけた。冬の輝かしき星々が黙示の瞬きを送ってくれた、言い知れぬ喜ばしさと涙ぐましさの中に。言を絶した或るものが私の胸に迫って来てならない。情の潮と共には退くことの出来ないある深い意志が胸の奥に坐を占めてしまっている。

くり返し顧う、何と罪業深かりし二十九年のわが歴史であったのだろうと。何と失敗だらけの過去を残してしまったのだろう。涙は流れないのであるが、私の心臓がおくり出しているものは血なのか涙なのか。特にこの十年間を振りかえって思うとき、

**「汝の法わが喜びとならざりしならば、私は終に艱難の中に滅びたるならん」**
**（詩119・92）**

と感ずること切である。ゲーテの言を藉りるまでもなく、闇が深くあっただけ光は有難く且つ強く私を打ちまた捉えたのである。過去を総決算して見ると、私自身の蒔いたものが愚と失敗と罪であったが故に、刈り取らるべきものもその外の何ものでもないことを知る。しかしそれにも拘らずかかる見苦しきガラクタの中に一つの宝石を見出したのである。ああこの宝石！　これを見出し、わがものとしたがために私の眼からはすべてのガラタクがその影を消してしまった、あれども無きものになってしまった。私の眼はその宝石を見凝めて余念なきものの如くである。数人挙ぐるべき立派なものを所有している智者たち、富者たち、権者たちは、私がこんなにも喜んでいる宝石を宝石とは思わないのである。彼らは心の中で嘲笑して私の眼は狂っていると言っている。私の眼が石鹸玉を見て宝石と做しているのか、彼らの眼が開いてはいるけれども此の宝石を見得ないのか、恐るべき「時」が審判くであろう。以上の私の心を言いあらわして余りある語を私はパウロから聴きたい。

曰く、

**「18それ十字架の言は亡ぶる者には愚かなれど、救わるる我らには神の力なり。19録して、『われ智者の智慧をほろぼし、慧き者のさときを空しうせん』（イザヤ書29・14）とあればなり。20智者いずこにか在る、学者いずこにか在る、この世の論者いずこにか在る、神は世の智慧をして愚かならしめ給えるにあらずや。……27されど神は智き者を辱しめんとて世の愚かなる者を選び、強き者を辱しめんとて弱き者を選び、28有る者を亡さんとて世の卑しきもの、軽んぜらるる者、すなわち無きが如き者を選び給えり。……30汝らは神に頼りてキリスト・イエスに在り、彼は神に立てられて我らの智慧と義と聖と救贖とになり給えり。」（コリント前1・18～30）**

宝石とは何か、言うまでもなくこの受くべき価値の寸毫もなき私に与えられたる恩恵である。恩恵とは何か、この世の幸福とは方向の反対であるところのキリストの十字架である。ガラタクそのもの、罪そのものであるこの私はキリストの十字架の上に消えてしまった、亡びうせてしまった、すっかり片がついてしまった。凡そ自分と言うものの興味がうっちゃられてしまった。彼の十字架をわが有にした自分はもう何も要らない人間になった。こんなことを真面目に心一杯言い得ることが既に何たる不思議であろう。これがもし天来の真理でないとするならば、私は自らを気狂と自らも評し人からも嘲られねばならない。

痛ましき極みなるキリストの十字架よ！　しかし見よ、キリストは既にそこには居給わないのである。わが眼は墓を追って辿るか。見よ、その墓の大石は転落して墓は空しく口を開いているばかりである。キリストは此処にも在まし給わないのである。

**「主は復活し給えり！」**

何たる嘉信であるか。私の衷に生命が溢れてくるのは何の故であるか。活けるキリスト！彼在まし給うが故に我らは限りなき生命にあずかり得ているのである。キリストがわがすべてのすべてとなって見ると、更に驚いたことには、十字架と空しき墓との彼方に大なるものが輝き聳えているではないか。何であろう。シオンの山である。それを時に翻訳して言うならば羔の大いなる日！　何たる希望であるか。

然り、キリスト、羔の一字に存するところのこの恩恵と生命と希望！　これをここに言い表わさなくては私はこの年を見送ることが出来ない。

どうしてこんな虫けらにひとしき者が、こんなに大きなものを攫んでしまったのであろう。世の中に奇蹟があるならば、その最も大なるものの一つに、否、最大なるものとして之をしも挙げ数えねばならないのでないか。愚か狂か、知る人ぞ知る。

私もまたある意味に於て――否、最も本質的な意味に於て――テニソンのいわゆる「砂州を越えて」しまった人間である。この虫けらは、既に恩恵の海の上にある。羔の日の希望の光が金波銀波を漂わせているではないか。何と云う壮美であるか。今にこの虫けらも恩

恵の海から希望の空に舞い揚がる日が来るであろう。年の瀬が墓場人の一里塚だなどとケチなことを何で言えるか。来る年ごとに歓喜の国へではないか。

眼から鱗の如きものが確かに落ち、生まれつきの自分が片付いてしまい、地に腰をぬかして天に腰を据えた人間、これがいつわりなき実感である。この腹の底からの声に誰か、同じく腹の底から然り！アーメン！と応えてくれぬか。

幼稚園から大学まで、幾人の友があったことだろう。しかも誰の一人も今私と路傍に腰をおろして感謝のいのりをささげる者は居ないのであるか。友この魂を思って私の胸に言い知れぬ涙が湧いて来た。これをどうしてくれる。

私の眼は歓喜の峯を仰いでいるけれども、私の脚は悲哀の谷を歩かねばならぬのである。それが基督者の道である。罪のためまことになやむことなくしては信仰はいつわりである。愛のため十字架を負わんとせずして何の人生であるか。神様を相手とし神様を実感して歩くのでなくして一切は空の空である。

終りに私事ではあるが忌憚なく言いたいことがある。それは外ではない。12月の21日我らが婚約を正式に――それまで二人の心が仮のものであったのでは断じてない。この場合例にひき出しては変でもあるけれども、キリストがバプテスマを受けられたように――成して見ると、いよいよ、地上の生活なんかはどうでもいいと思うことの強くなった事である。私達はかの清教徒（ピューリタン）らが大西洋を渡ってしまったように、イスラエルの民が紅海を越えてしまったように、この世には死んでしまったのである。磁針が北を指すように私達の眼がシオンの山の羔を仰ぐとき本当の眼であることを知ったのである。我らは弱き者であるから困難に遭ってどんなざまになるかを知らない。しかし弱さを我らは心配しないであろう。

**「神はわれらの避所また力、なやめるときの最ちかき助けなり」（詩篇46・1）**

となって下さるであろう。

**「誠をもてエホバを呼ぶものにエホバは近く在まし給う」（詩篇145・18）**

ことを学ぶであろう。然り、我らの信仰、我らの力、我らの智、我らの弱さ、そんな凡そ我らと形容されるものが、一体キリストの愛に対して何であるかと言うのか。

キリストの愛の故に我らの生死は聖旨のままになれかしであって、キリストの愛のために御恩返しをなど云う心と力とを有たんがためには我らは余りにも砕かれてしまったのである。キリストの愛の前に魂が砕けてしまっていること、これより外に何もないのが我らの魂の内容であろう。こういうものを捉えて神様はキリストのために我々に何かを要求なさるのであろう。そして力を与えて下さるであろう。それはすべて神様がなさることであって、生まれつきの、自分自身と云う自己を愛する自己が、どんなにガンバッテも、抗することの出来ない力を以て、この自己を殺して、神様が自ら男性は男性らしく用い、女性は之を女性らしく用いて、そのみ業をなし給うであろう。我らは正に喜びてその御用となる

べきである。後になるも前になるも夫妻の凱旋は一つである。安心しよう。ただ願う、船長が殿（しんがり）とならんことを！

**「エホバはわが牧者なり」**

と云う豊かな心を以て我らは前進すべきである。

**「われは道なり、真理なり、生命なり」**

と言い給いしキリストは基督者のものである。基督者はこの基督のものである。ああ壮（さかん）なる哉キリストの道！　いざ進まん、いかなる風波の日にも希望は羔の日なるぞ、拠所（よりどころ）は十字架なるぞ！

さらば１９３２年よ、我ら汝の故に神に感謝し奉る。私のためにいのり、苦しみ、働き、犠牲をはらってくれた人々よ。有難う、有難う。

私の胸の中にいのりが満つる。しかし今私は筆にすまじ。天の兄よ、易らぬいのりをおねがいします。聖霊の御執成（とりな）しつねに我らの上にあらんことを。栄光唯主にあらんことを！

アーメン。

――１９３２年　大晦日夜三時

# 詩篇（3）（自由訳）

Rudolf Kittel : Psalmi

第11篇～第15篇

## 第11篇

伶長(うたのかみ)をして、ダビデより。

1 エホバにこそ私は依頼(よりたの)んでしまったのだ。どうして汝らはわが魂に言うのか、「遁(のが)れよ　汝(おまえ)の山へ　鳥め！

2 と云うのは、見よ！　悪い奴らが弓を張り、彼らの矢を弦(つる)につがえた、暗闇の中から心の直き者らを射ようとして。

3 若(も)し柱礎(もとい)が砕かれたなら、義人は何をしたらいいのか」と。

4 エホバは聖殿(きよきみや)に在(い)まし給う。〔ああ〕エホバ、その聖座(みざ)は天に在る、その眼(まなこ)は視、その眼瞼(まぶた)は試み給う人の子らを。

5 エホバは義人を試み給う、しかし悪人と強暴(あらび)を愛する者とをその聖心(みこころ)は憎み給う。

6 彼は悪人の上に罠(わな)を雨と降らし給うであろう。火と硫黄(いおう)と灼熱の風とは彼らの酒杯(さかずき)に受くべきものである。

7 誠に義(ただ)しきはエホバである、彼こそは凡(およ)そ義(ただ)しきを愛し給うから、直き者は彼の聖顔を見るであろう。

＊

1．「鳥のごとく」as a bird, gleich einer Vogel と訳してあるけれども、むしろ直接に「鳥め！」と訳した方がこの時の語気に近いのではないかと考える。もちろん発言者自身も論理的に反省すれば「鳥のように」の意であるとは云ってあろうが、言はしばしば論理を破っているところに生命と直接性とを有つものであるから。

## 第12篇

伶長(うたのかみ)をして、八音(やつね)に依(よ)りて、ダビデに依る歌。

1 〔ああ〕助け給えエホバよ！　愛(いつく)しみある人は絶えました、真実(まこと)ある者らは失せました人の子らより。

2 虚偽(いつわり)は人がその隣(となり)人と語るところ、滑(なめ)らかなる言語(ことば)は二心(ふたごころ)をもて彼らの出(い)だすところ。

3 エホバ、滑らかなる唇と大袈裟にもの言う舌々をすべて切り給わんことを。
4 斯(か)かる者らは言う、「われらの舌によって我らは強い、
我らの唇は我らの属(もの)、誰が主たろう我らに対して！」
5 エホバは言い給う、「困(くる)しむ者圧(おさ)えられ、惨めなる者嘆くが故に
今ぞ私は起きあがる！
私は置いてやろう平安に、彼らはそれを喘(あえ)ぎ求めている！」
6 エホバの言辞(ことば)は純(きよ)き言、
地の炉で錬られ、七度浄められたる白銀である。
7 エホバよ、汝(あなた)は彼らを守り、
彼らを保ち給うでしょう、永遠にかかる族(やから)から。
8 到るところに悪しき者が歩いています、
くだらぬ事が人の子らの中にもてはやされて。

＊

1 「敬神の人」の意もあるけれどもそれは第二義的で、「恩恵」「愛」と云うのが第一義である。英、独訳にも「敬神の人」の意にとっているけれども、ここでは第一義の方をとる。

## 第13篇

伶長(うたのかみ)をして、ダビデに依る歌。
1 いつまでございますか、〔ああ〕エホバよ！
私を御忘れになるのでございますか、いつまでも。
いつまでお隠しになるのでございますか、貴神(あなた)の聖顔を私から。
2 いつまで私は（わが）魂の中に配慮(おもんぱかり)を横(よこた)え、
日ごとに（わが）心の中に悲哀を〔抱くのでございますか〕。
いつまで高められているのでありますか、わが敵は私の上に。
3 御覧下さい、お応え下さい私に、〔ああ〕エホバ、私の神様！
〔どうか〕私の眼を明るくして下さい、でなければ死の睡(ねむ)りについてしまいます。
4 敵をして「われは彼に勝った」とは言わしめ給わぬように。
私が動かされてわが仇(あだ)が喜ぶことのありませんように。
5 そうです、私は貴神の御憐憫(あわれみ)に依頼(よりたの)み、
わが心は貴神の救(すくい)に喜びましょう。
6 私は歌おうエホバに！　彼は豊かにあしらって下さったから。

＊

第14篇

伶長に、ダビデに依り。

1 愚者は心の衷で言った、「神は無い」と。
彼らは腐ってしまった、彼らは悪むべき行為をしている、
善を行う者は絶えて無い。

2 エホバは諸々の天より人の子らを瞰下して、
若しや理の解った者が居て神を探ね求めはせぬかと見給うたのに、

3 すべてが背いて悉く堕落している、善を行う者は絶えて無い。
一人すら居ない。

4 不義をなす者はすべて理が解らないのか、わが民を喰う彼らは。
彼らはパンを喰って、エホバに呼ばわることはしない。

5 見よ！　彼らは怖れに怖れたのだ、そは神は義人の族と共に〔在まし給うた〕
からだ。

6 苦しめる者の謀を汝らは蔑るがいい、でもエホバは神様の避所だぞ。

7 誰がシオンからイスラエルの救拯を〔呼び〕出して下さるのだろう。
エホバその民の捕囚を返したもうとき、
ヤコブは喜びイスラエルは楽しむであろう。

＊

第15篇

ダビデに依る歌。

1 エホバよ、どんな者が貴神の帷帳に宿って宜しいのでありますか。
どんな者が貴神の聖山に住んで宜いのでありますか。

2 真直に歩み、義を行い、その胸の中に真実を語る人！

3 斯ういう人は舌で譏らず、その同胞に悪事をなさず、その隣人に侮蔑をも
たらさない。

4 背神者は彼の眼にはさげすまれ、エホバを畏るる者を彼は貴ぶ。
彼は誓っては禍害となるとも、而も（彼は）変えることはせぬ。

5 彼は銀を貸して利子をとるようなことをせず、
また賄賂をいれて無辜の者を害うようなことをしない。
かくのごとく行為う者は永遠に動かされることがない。

**人生の厳粛事**

結婚 ―― 友の結婚を祝して

死別 ―― 嬰児を天に送る

## 「友の結婚を祝して」

１９３０年３月21日友人某兄の結婚式にて述べしところ

**「此れエホバの設け給える日なり、**

**われらは此の日に喜び楽しまん」（詩篇118・24）**

聖旨によりまして、本日私共は△△△△兄と○○○○姉の御結婚の式を挙げることになりました。大なる歓びであり、深き感謝でございます。ここに私共は静かに聖きことに就いて思い、信ずるところを言いあらわして心から聖名を讃えたいと存じます。

私共は聖旨に依りてと申します。今日がいわゆる吉日であるか否かの如きは私共には毫も問題となり得ないのであります。私共は朽つべき暦を調べず、眼を天に向けます。そこには神の大いなる巻物が開かれているではありませんか。その中には今日のため御両人の婚姻のそなえあるべきことが記されてありませんか。それのみではありません。聖旨は天に今成就しつつあります。かくて地にも成らしめ給う神を仰ぎ私共の心から讃美のうたが昇らざるを得ません。

**「汝わが仇の前に我がために筵を設け、**

**わが首に膏を注ぎ給う、**

**わが酒杯は溢るるなり」（詩篇23・5）**

「汝わが仇の前に」と、その意味は深くあります。敬愛する兄姉を思いてその春の野の筵とは異なるものであることを切に感ぜしめられるのでございます。幸なるは敵前にて恩恵を蒙る人であります。誠に神に備えられ、神に司って戴いて私共の求むるところ外に何がありましょう。１９３０年３月21日は誠に此くの如き婚姻の故に私共に限りなき意義を齎したのであります。万人は神のみ前に等しくありますようにすべての日はみ前に変りなきものであります。しかしまた万人がそれぞれ独自の使命を負わせられたる存在であると同様に、各の日は他の日を以て易えることの出来ない意義を付与せられて居ると思います。

**「此の星はかの星と光栄を異にする」（コリント前15・41）**

と云われるようにこの日はかの日と光栄を異にいたします。而して、

**「日を重んずるは主のために之を重んずる」（ロマ14・6）**

のであります。また今日の如きは御両人の地上の旅路の許多ある日の中にて最も輝かしき光を放つ光ではございませんか。然り！　此の日は常に御両人にとってのみならずお二人

故にこの日を憶える肉親の方々、親戚友人一同にとりまして永遠より迎えられ、一度来りて而して唯一度（ein für allemal, once for all）の厳粛なる一日でございます。而してまたこの日は新生の第一日として、結婚生活への如実の本質的第一歩としてこの日に続く永続の日々に対して不可離の関係に立っています。誠にこの日の有つ意義は、然く特殊的でありながら且つ普遍的であると思います。

然らばこの普遍的意義を有たしめる本体は何でありましょう。眼を瞠らいて上を望みます。厳かなる門が立っているではありませんか。そこに燦として輝く文字は何とありますか、曰く「婚姻」！と。虹の如く輝くその門、永遠に不滅なるその文字！　パウロのいみじくも述べし、ヨハネの奇しくも示されし奥義でございます。これは誠に人生の秘義であり、宇宙のいのりであります、神の大経綸であります。翻って思いますのに、凡そ人の住むところそこに結婚生活ありであります。婚姻とは余りに有りふれたことではないか、大地に草が生え、木が生じていると同様にあたりまえのことではないか。言うを已めよ、外的一般の現象の故に、内的普遍の本質を忘れるものは誰でありますか。そこに真理が宿りしているのではありませんか。婚姻は即ち生命の真理ではありませんか。真理の具現なる結婚生活をして場なきものとなすは神を忘れると等しくあります。詩人は路傍の一草に宇宙の鍵を見出します。況してこの婚姻に深き意義なきはずがありません。私共はこれを聖書に求めます。永遠のこの書に何と記されてありますか。

**「人独りなるは善からず、我彼に適う助者を彼のために造らん」**

を以て始まる創世記第2章後半の記事の示す真理の何ぞ深き。これを神話として笑うこの世の智者をして笑わしめよ、読む人は読みます。聴く耳あるものは聴くのであります。そのエバの創造の秘義は何でありますか。アダムの深き眠りの奥義は何でありますか。アダムはいかなるアーメンの讃歌を詠いましたか。

**「これこそはわが骨の骨、わが肉の肉なれ。此は男（イーシュ）よりとりたるものなれば女（イッシャー）と名づくべきなり」**

と。誠にエバの生命のためにアダムは一度死に等しき経験をせしめられたのであります。而して誠にアダムの存在と共に既にエバは造られていたのであります。アダムは早曩のアダムではなく、エバもまたさきの存在と異なります。ここに婚姻の厳粛味があります。然り！敬愛する兄姉よ、私をして敢えて言わしめよ。

婚姻は先ず十字架であり、而して復活である、と。

虹と輝く悲壮美の婚姻の門を今、貴兄貴姉等は通られるのであります。復活の朝と輝く婚姻の文字を貴兄貴姉等は今眼のあたり見られるのであります。誠に今日より貴兄姉等は新しき生涯に入られるのであります。

聖書は厳粛に申します。

**「夫は妻の首なり、夫はその妻をおのれの体の如く愛すべし。キリストの召**

**団を愛し、之がために己れを捨て給いし如く、汝らも妻を愛せよ。夫は妻の首なれば、召団のキリストに賜う如く、妻も凡てのこと夫に服え。……此の故に人は父母を離れ、その妻にあい、二人のもの一体となるべし」（エペソ5・23～31）**

然り、「二人のもの一体となるべし」とは旧約に宣せられ、新約に応えられているところの神の大いなる律法であります。単純にして深き道であり、真理であります。真理をして真理の故に貴からしめよ。婚姻は断じて生活の手段ではありません。生活は婚姻の必然的な現われたるにすぎません。

かの一般に望まるる家庭の幸福、家系の継承、子孫の繁栄、財富の蓄積、美名を負う社会奉仕、これらが婚姻生活の意義でありますか、目的でありますか、難ずるも愚かな話であります。然るに現代の人々はこの空の空なるものを追い求めて空しきに気づかざるとは余りのことではありませんか。真理を貴まれる此の御家庭をして、どこまでもこの蹈々たる一切の幸福主義、便利主義を足下に踏ましめよ。ここには魂と魂との愛と信頼による結合、人格と人格のいみじき一体の中に真理故の日々あらしめよ。神故の生活あらしめよ。近代人のあの本能的なる、現世的なる、陽炎の如くゆらめき、蜉蝣の如く儚き愛とこのホームの愛と何の関わりがありましょう。神の厳然たる意志に基づきて建てられ、結ばれたるお二人は即ち義務よりする、自由よりする天の愛の中に婚姻の生活をおくられることと信じます。

**「愛は凡そ事忍び、凡そ事信じ、凡そ事のぞみ、凡そ事耐うるなり。愛はいつまでも絶ゆることなし」（コリント前13・7～8）**

アーメンであります。

詩篇第127篇に、

**「エホバ家を建て給うに非ずば、建つる者の勤労は徒しく、**
**エホバ城を守り給うに非ずば、衛士の醒め居るは徒労なり」**

とうたわれてあります。されば神の建て給いしこの家を、千歳の磐の上に築かれしこの城を何ものが倒すを得ましょうか。キリストを一家の主として何の怖れがありましょう。

わが敬愛する兄姉は、すでに人生の辛酸を尋常ならず嘗めて来られたのであります。△△△△兄にありましては、その御両親を既に天に送って居られるのであります。主キリスト・イエスは、いかに此の婚姻に深き同情と満腔のよろこびとを以て天にて祝福し給い、今この小さき集まりに共に在まし給うことでありますか。

**「幸なり、貧しき者、天国はその人のものなればなり」**

そのあたえを今受けざるものは幸であります。此の天的の歓びを共にするは今日を憶える少数のものばかりではございません。天使らが讃っています、聖手の業なる自然が讃美しているではありませんか。ミルトンの歌と共に私共は彼ら天使に呼びかけます。

"Speak, ye who best can tell, ye sons of light,
Angels; for ye behold him, and with songs
And choral symphonies, day without night,
Circle his throne rejoicing; ye in Heaven
On Earth join all ye Creatures to extol
Him first, him last, him midst, and without end."

（Paradise Lost By John Milton Book V. 160-165）

「語れ、汝ら告げ得る光の子らよ、
天使らよ、そは汝ら彼を見、歌をもて
合唱の諧音をもて夜なきの日々、
聖座を悦びめぐるもの、――汝ら天にて。
地には汝ら万物ともに彼を讃めよ、
始めも、終りも、中も、涯（はて）なく彼を。」

（『パラタイス・ロスト』V. 160～165、藤井武先生訳）

今日を以てはじまる婚姻生活に風も吹き来りましょう、雨も降り注ぎましょう、碧空輝く真昼も恵まれましょう、星なき夜も訪れましょう、木ぬれの露の輝く晨もありましょう。戦ははげしくあります、我らは幾度、破れ、行きなやまねばならぬことでしょう。理想は余りに夢の様ではないか。現実は余りに嘆きに満ちているのではないか。しかししかし、信仰は申します、いつか、げにいつか、お二人は理想の姿に完うせられることを。然り、而して、理想は信の中にすでに把握されてあるのであります。われら破れば破れよ。

**「我既に世に勝てり」**

と言い給いし者我らと共に在り、彼は我らを破れしめ給わないのであります。本当に、キリストの前に潔き新婦として人類が現実に立つ大いなる羔（こひつじ）の日が待たれます。我らいのらざるを得ません。

斯くて、

**「われら思うに今のときの苦難（くるしみ）はわれらの上に現われんとする栄光に比ぶべくもあらず」（ロマ８・18）**

であります。われらの苦難は何のためでありましょう。ただ主の故にでありましょう。

**「我らの中、己れのために生ける者なく、己れのために死ぬる者なし。われら生くるも主のために生き、死ぬるも主のために死ぬ。然れば生くるも死ぬるも我らは主の有（もの）なり。」（ロマ14・7～8）**

アーメンであります。

愛する兄姉よ、イザヤ書24章に曰う、

**「地の極（はて）より我らうたをききけり、曰く**

**『栄光は義しき者に帰す』と」。**

この祝福されたる午後よ、自然はこの御婚姻の日をいかなる讃美を以て迎えているのであろう。ミルトンのうたに、

「……全天
また福いの諸星座その時しも
いと妙なる感化を放つ。地も山も
祝賀の徴をしめす、鳥はよろこび、
爽やかなる風、静かなる空気は
これを森にささやき、その翼より
薔薇を投げ、香木より薫香を投げて
楽しみ、ついに有情の夜の鳥は
婚礼をうたい、宵星を急がせて
その山頂に新婚の灯火をともさす。」

（『パラタイス・ロスト』Ⅷ 511～520、藤井武先生訳）

願わくは、主自ら新しきホームの主にてあり給わんことを。
神の栄光ここに現われんことを。
婚姻の御生涯自体がいのりであり讃美であり、
神の真理のあかしであらんことを。

アーメン、ハレルヤ。

〔易らぬいのりをわが友のホームのためいのりつつ〕

〔附記〕

Y・S兄
E・K姉

ご結婚式に於ける聖句の朗読

**創世記1・1、27、2・18～24**

**エペソ書5・22～33**

今は地に亡き井浪弘兄がこの朗読と初めの祈祷を捧げてくれた。

**妻たる者よ、主に服うごとく己の夫に服え　――エペソ5・22**
**夫たる者よ、キリストの教会を愛し、之がために**
**己れを捨て給いし如く汝らも妻を愛せよ。　――エペソ5・25**

# 「嬰児を天に送る」

――菊地百合子嬢告別の式――

１９３２年12月18日（日）

〔附記〕

当日朗読せし聖句

コリント前書第15章40～58節

詩篇第23篇

中井菊二郎兄、これが朗読と初めの祈りを捧げてくれる。

**「視よ、われ汝らに奥義を告げん、我らは悉く眠るにはあらず、終りのラッパ鳴らん時、みな忽ち瞬間に化せん。ラッパ鳴りて死人は朽ちぬ者に甦えり、我らは化するなり。」（コリント前15・51～52）**

**「たといわれ死のかげの谷を歩むとも禍害をおそれじ。汝われと共に在ませばなり。」（詩篇23・4）**

＊

（こうやって小さい方の遺骨を前にいたしまして、私、言がございません。私の如き、こんな美しい小さな方の前で、何か申上げられるはずのものではございません。……〔ただゆるしていただきます〕。）

私共の間から可愛き花のような人が取り去られました。血をお配ちになって居られます御両親のお悲しみを心からお察し申上げます。如何にお慰め申上ぐべきかを存じません。あの涙の預言者エレミヤが書き遺しました言葉が思われます。

**「エホバかく言い給う、嘆き悲しみ、いたく憂うる声ラマに聞こゆ、ラケルその兒子のために嘆き、その兒のあらずなりしに依りて慰めを得ず」（エレミヤ31・15）**

誰が愛する子を喪われました御両親のお悲嘆を癒し得るのでありましょう。この世のあらゆるものが、その失せしお子様の換わりに提供されましょうとも、それは徒しき業に過ぎません。此の喪失によって生じました深い穴を満たさんとすればするほど、却って満たされざるものが残るのではございませんか。世界を以てしても充たす能わざるこの空虚は何でございましょうか。それをどうしたらよいのでございましょうか。ただ悲しみを知るもののみが悲しみに応え得るでありましょう。しかしそれとても竟にこの空虚を如何せ



制作・著作： HP「小池辰雄文庫」

ファイル名：PDF 小池羔　作成 2024/09/09　修正 2026/10/24　出力 2026/10/24

んでございます。これをそのまま満たす道は唯一つより外ございません。即ち失せし我が子の帰り来らんこと之でございます。即ちその復活あるのみでございます。放蕩息子は或は帰り来たりもいたしましょう。しかしながら、この世より去りたる者がいかで再び帰還し得ましょうか。望みの断絶であります。この深刻なる悲しみがどうして癒されましょうか。マタイ伝に、

**「子等のなき故に慰められることを厭う」（マタイ2・18）**

とあるは本当の悲しみの心であろうと存じます。昔、イエスがヤイロの一人娘を

**「子よ、起きよ」（ルカ8・54）**

と言いて起こし給いし如く、ここにも昔にひとしき奇蹟が行われるのでないならば、我々は絶望であるごとく見えます。私共に何の力があってその涙の泉をとどめ得ましょう。

しかしながら、御両親と共に私共はこの悲嘆の中で、人には絶望であるこの窮間で、眼を只上に向けようと思うのでございます。そしてそれより外に道がないのでございます。かく私共の心が向くべきところへ向くことを得ましたならば、苦しいのでありますけれども、心をしずめて見たいと存じます。

慮いますのに、凡そ弱き者とて乳児の如きはございません。彼女は母親なくしては半日も在ることが出来ません。誠に独立から遠いものとて嬰児の存在の如きもまたありますまい。乳児には信頼すると云うことの外何もなきもののようであります。然らば此くの如く親の外何人をも知らず、世には何一つなすところなき、弱く、無智にして、無為なる生死は朝露の消えるのと同じような意義しか有ち得ないのでありますか。他人の目からは大した出来事ではなく、現世の無常の相の一つの現われに過ぎぬのでもありましょう。けれども御両親のハートは、そのために一度び破れたのであります。その深きお悲しみは、言辞を以ては訴え得ぬところの深き何ものかであります。この事実は何でございましょうか。ここに我々は人生の厳粛なるものに触れないでは居られません。この事実を安価なる諦念の中にごまかし葬るは、人生をいと軽くとり扱い、且つ神を無みする所以であると思います。

それならば何故に、最も弱き価値もなく見ゆる嬰児の失せましたことが、凡そ人生に対して真摯であろうとする人にとって、癒すべからざる大なる空虚を悠忽の中に作り成したのでありましょうか。他ではありません。嬰児もまた、彼女自身の自覚如何に拘らず、一個の厳然たる人格的存在であるからであります。小さい百合子様の存在が、僅か半月ほどの短き間であったと云う故を以て軽んずる者が世にあるといたしますならば、その人は人間が神の姿にかたどられてつくられた人格であることを明らかに軽視するものであります。然るに此の如き人格の観念を真剣に抱く人の少なき世であればあるだけ、我々は人格の尊厳と、人生はその長短によって価値づけられるのでは毫もなく、人生は一日が千年の意味を有すると云うこととを強く言いあらわさなくては居られません。本質的なることをよそにして人々は何を問題としようとしているのでございますか、嘆かざるを得ないのであり

ます。

乳児もまた、何ものを以てするも換えること出来ない一つの魂を有して居ります。而も何人の魂が、乳児のそれの如く純一無雑、無辜にして天真なるものであり得ましょうか。幼児の人格は凝って一個の愛らしさと云う無比の美わしき珠玉に結晶しているのではございませんか。そしてこの清き愛らしさと云う存在そのものにもまして力あるものが世にあるとは思われないのであります。と申しますのは、英傑の心も一指の動揺からサタンの捕虜となってしまいます。けれども奸計に長けたるサタンも幼児の純一なる心の前には攻撃の矛先の向けようがないのでありましょう。それが、詩篇第８篇におどろくべき聖言ある所以であります。

**「汝は嬰児、幼児により力の基を置きて敵に備えたまえり。こは仇人と怨を報ゆる者とをしずめんためなり。」（詩篇８・２）**

それぱかりではございません。この世では権力も資格もなきおさな児に就いてイエスは何と申されましたか。我々は余りにも著しきかの数言を忘れてはならないのであります。

**「幼児らを許せ、我に来るを止むな、天国は斯くの如き者の国なり。」（マタイ19・14）**

**「誠に汝らに告ぐ、もし汝ら翻りて幼児の如くならずば、天国に入るを得じ。されば誰にても此の幼児のごとく己を卑うする者は、これ天国にて大なる者なり。また我が名のために、斯くの如き一人の幼児を受くる者は、我を受くるなり。」（マタイ18・3～5）**

**「我を受くる者は、我を受くるに非ず、我を遣しし者を受くるなり。」（マルコ9・37）**

**「汝ら慎みて此の小さき者の一人をも侮るな。我汝らに告ぐ、彼らの御使たちは天にありて、天にいます我が父の御顔を常に見るなり。」（マタイ18・10）**

ここに於てか我らは知るのであります。この世にて最も力なく見ゆる者が実は驚くべき力を、その信頼の故に、すでに備えられて居り、意義なきつまらぬ小さな存在と思わるるものが、却って神の眼には、その見ばえなさの故に、最も価値があり、「天国にて大なるもの」であり、片言隻語もわきまえざる無智の乳児が、いかなる智者賢者よりも、その心の貧しさの故に、天国に入るべき資格ある者であり、卑うせられているものが、その従順の故に、最も貴きものとして神のみ座近く侍る者であり、侮られがちなる彼らは却って神の特別なる庇護のもとに聖顔にそのさまが映じて、常に神に顧みられていることを。

何故に世の智識と神の智慧とはかくも逆行するのでありましょうか。他なし、世の智識は己れを生かさんとし、神の智慧は己れを無きものとするからであります。今申しましたように、彼らが信頼深くあり、心貧しくあり、従順であり、真実であるところに却ってまことの生命を有っているのであると思います。そして誰か嬰児にこれらの点に於て比肩し

得ましょうか。そしてこれこそは人の神に対する態度のすべてであると思います。嬰児も罪びとの裔ではありますけれども、かくの如き無辜の魂が神の前に貴まれるのは、蓋しあまりにも然かあるべきことではございませんか。

斯くて嬰児の死は、人が思いますように単に可憐なる出来ごとでは断じてありません。朝露の如き消滅でも断じてありません。私は思わざるを得ません。かの瑕なき当歳のアザゼルの山羊が曠野に独りその道を辿る厳かな一情景を。小さな小さな花の如き一人の人が、世の人々には顧みられもせずして地を去ったのでございます。小児の死と子山羊の不帰の門出よ！　人の世は此くの如きことを要求する何ものかを有っているのではございませんか。彼女の去りましたのは、必ずや何らかの深き意味に於て我ら残されしもののためであったのでございます。具体的に何のためであるかを指摘さるべきものではあらぬにしても、かくの如き清きは秋空に比すべく、美わしきは冬の夜の星にひとしきものの死が、事実我らの間に起こったと云うことは、必ずや道徳的法則、更には深く生命の原理に基づくものであるとしか考えられません。

**「誠に誠に汝らに告げん、一粒の麦若し落ちて死なずば、唯一つにて在らん。然れども若し死なば多くの実を結ぶべし。」（ヨハネ12・24）**

これを一言にして註せば正に一つの十字架であるのでございます。

彼女は一語をも語らずに去りました。しかし彼女の口には限りなき言が蔵められていたのであると思います。それは何でございましょう。残されたる人々への許多の祈りであると私は信じます。彼女はパラダイスへ行きましたから聖座近くにて生い育ち、特に御家庭の方々のためにいのりの年月を多く有たることと確く信じます。何と美わしき彼女の前途ではございませんか。彼女は我々の肉の眼では見えませんけれども、彼女の愛は最もきよきあつきものとなりて御家庭に溢れるに相違ありません。私も二人の兄と一人の妹の死の愛に囲まれて育ちましたので実感を以て申上げるわけでございます。

独乙の青年詩人ノヴァ―リスがその日記に書き記した言に次の如きがございます。

「この世界には、超現世的の源を有する花が往々にして在る。その花は現世の気候には栄えない。彼等は、或るより善き存在の真の先駆であり、伝令である。」

"Es gibt manche Blumen auf dieser Welt,die überirdischen Ursprungs sind, die in diesem Klima nicht gedeihen, und eigentliche Herolde, rufende Boten eines bessern Daseins sind. (Unter diese Boten gehören vorzüglich Religion und Liebe.)" Novalis' Werke 3Teil„ Religiöse Fragmente.

この一句には深い消息が暗示されていると思います。余りにも悪しきこの混濁の世に永くあることが使命でない人々があり、彼らの存在が純粋に天の愛、執成しの祈りであらんために、神はその最も善しとお思いになるときに――そはしばしば人の考えからは全く反対に最悪と思われる時に――そういう期に忽然として聖許に召し給うと云うことでありま

す。私はしずかに思うのでございます、神様はかくもはやく召し給う様にこの小さき百合子様を深く愛し給うのであると。そして神はその愛子をとり給うほどに御両親を愛し給うのであると。神が彼女を厚く愛し、神が御両親を深く愛し給うて、神様はかくも悲しきことをなし給うたのであると信じます。然り、是れ、神御自身が最も善しとし、よろこび給うところなのではありませんか。それより外に私共は神様の仰ぎようがないまでに、神様につかまえられてしまったのではございませんか。神の愛が人の情としては、いとも辛き悲しみの中に御家庭に現われざるを得なかったその深き限りなさよ！　此くの如きこの世の思いとは、またしても全く逆行する真理を聖書から学び、また一切を立ち越えて実感いたしましては、本当にあのヨブの、

**「エホバ与え、エホバ取り給う。エホバの聖名は讃むべきかな」（ヨブ1・21）**

と云う讃美が心の奥に湧き立つを覚えます。コーヘレスの、

**「死ぬる日は生まるる日に愈る、哀傷の家に入るは宴楽の家に入るに愈る」（伝道の書7・1～2）**

とは本当にかかる心の消息ではございませんか。悲痛の心の中からこそ、そのみ名の讃美でございます。涙の眼を以てしてのみ、み顔はハッキリ仰がれるのではありませんか。地上に於ける人生は爾く矛盾の相にあるのが、十字架の民の、神の市民の、真相であると云うことを、我々年と共に明らかに知らしめられることは、何と信仰と希望とを永遠の故里、真理の国土に確く基えてくれるものではございませんか。悲哀の谷がそのままに歓喜の峯であることがどうして人の智慧からつくり出されましょう。天の幸の奇蹟はここにありでございます。斯かる神こそが永遠の生命を賜うところの限りなき愛の神ではございませんか。

「嗚呼神よ、悲惨の道は、
余が爾に到るの経路なりき。」

（内村先生「愛吟」ジェームス・バッカム）

"O God! The path of grief has been
My way of guidance unto Thee;"
(and still, through clouds that shut me in,
I follow though I cannot sea.)　Amen!

―― James Buckham : The Higher Faith.

と言い得ることそのことの何たる幸でありますか。イエスが「幸なり、……」としずかに諭し給うた人々はどんな種類の人達でありましたか。神様から本当の名誉の傷を賜りし人々が本当の幸なのでございましょう。そして私は思います。おさなごを天に送りし御両親は神様の最もよろこび給うことの一つをなさったのであることを。これからは御両親に大きな何ものかがより強き新しき実感を以て臨み来ることを信じます。申すまでもございません、キリスト・イエス御自身でございましょう。

**「我は復活なり、生命なり」**

と云い給う活けるキリストでございます。まことにキリストの死に於て愛は徹し、復活に於て生命は全うせられたように、それと同質の業を小さき百合子様はなし且つなしつつあるのでございます。神の御あわれみ彼女の上に親しくあらんことを。

肉眼を以て相見ゆることは今は叶いませんけれども、彼女は別な生命を以て現実に御両親と共に在られることを、私も己がほぼ類似の経験から申上げ得るのでございます。かくて我らは悲しみながらも、大なる平安を以て彼女をキリストの聖手にゆだねまつるのであります。

此くの如き深き愛の神を知りまつりてからは、我々は何と豊かな世界の人になったのではございませんか。一切の波浪の上に厳として存する岸高き国への希望は溢れるのであります。我らに於きましては、

**「見ゆるところは暫しにして見えざるものは永遠に至る」**

のであります。やがて我らも永遠の国に至り、しばしの別離の渇きは、その親と子との間に、兄弟姉妹の間に、その友と友、その師と弟子、そのいもせの間に、癒され、限りなきいのちの中に神の「聖顔の輝きを以て慊る」ことを得るのであります。人の子の来り給う大いなる日の後は、もはや嘆きも悲しみも残りなく拭いさられ、涙は再び悲しみのために流れず、――（永遠の国に於ても、私はそこに涙の存在をみとめずには居られない。心の深き感動は涙となってあらわれるであろう）――真理より真理へ、愛より愛へ、讃美より讃美へ、羔の栄光より栄光へと進みゆきて尽くることを知らないでありましょう。

然り、お子様は、小さき白合の花は、断じて失せたのでも散ったのでもございません。再び比ぶべくもなき幸の国にて、美しき乙女として御両親を迎えまつらんために、然り、御両親と共ならんために。誰かそのときの祝福されたる抱擁をねがわざる。讃むべき哉、神、我らの主、我らのたまわりたるこの希望をいつか、必ず、実現し給わんことを。アーメン。

御恩寵、御家庭の上に深くあらんことを。

〔本稿、12月17日夜12時より殆ど徹宵にてしたためたり〕

＊

**「わが父の家には住処多し。……**
**われ汝等のために処を備えにゆく。……**
**また来りて汝らを我がもとに迎えん。」**

**――主イエス　（ヨハネ伝14章）**

何と云う慰め深き聖言であろう。イエスのこの言のために、一切はどうなってもよくなってしまう。主よ、聖旨ならせたまえ、アーメンである。

ヒルティー原著

# 「眠りなき夜のため」上巻（3）

Carl Hilty：Für schlaflose Nächte, 1.Teil, 1919.

〔　〕はすべて訳者註及び敷衍。この圏点は原文にて強められたるところ。
また、この圏点は訳者の強めたるところ。

## 12月1日

老年の始まる頃の或る期、我らは一度び過去に対して結末をつけねばならない。腹立しく念ったり、顧みて残念がったりすることなく、その〔過去と云う〕本を閉じて最早これを開かぬようにしなければならない。〔反之〕その中のすべての善き事に対し、殊にすべてが善き終結に到達したと云うことに対して感謝しなければならない。それからまた非常に多くの事は最早起る必要がなく、却って永久にかたづいていることに感謝すべきである。斯くて全く別なものであるところの「永遠」の生命に前進せよ。その生命に入る条件はヨハネ伝第17章3節、及び第6章40節に在る。〔即ち曰く、〕

**「永遠の生命は、唯一の真の神に在す汝と汝の遣し給いしイエス・キリストを知るにあり。」（ヨハネ17・3）**

**「わが父の御意は、すべて子を見て信ずる者の永遠の生命を得る是なり。われ終の日にこれを甦えらすべし。」（ヨハネ6・40）**

前進はこれからは無限なるものである。

「上なる方への巡礼の途に於て
更に大なる深き教えを学びつつ、
祝福されたる労働の中に我らは
倦まず息まずあらまほし、
而も常に新たなる力を以て
聖なる者真なる者に仕えなん。」（ディーン・スタンレー　Dien Stanley）

そのうえなおまだ言わなければならないことがある。それはただに「罪の赦免」ばかりではなく、なお更に何ものか、即ち罪を自ら忘れると云うことである。

この「赦し」と「蔽い」との差別をローマ書4章7節と詩篇32篇1節とがなしていると思われる。〔前者に曰く〕

**「不法を免され、罪を蔽われたる者は幸福なるかな」（ロマ4・7）**

〔これ蓋し後者をパウロが引用したものである〕。〔後者に曰く〕

**「その愆をゆるされその罪をおおわれし者は福いなり」（詩篇32・1）**

これは時間の上からもまた遠く互いに隔たり得る二つの異なれる段階である。而も人間

自身に於ける悪の凡ゆる追憶を絶滅してしまうことによってのみ神の赦免は全うされるのである。と云うのはその時にして初めて正にこの痛ましき記憶がなおも防がねばならぬような悪への復帰を怖れるに及ばないからである。

すべての罪並びに人生の有ゆる厭わしきもの、難きことに対する記憶が一般に沈んでしまい、その結果神の限りなき恩恵と云う幸福〔を齎す〕感のみが残るようになるレーテの流水はダンテにとって彼岸即ちパラダイスにあるのではなく、なお此の岸なる浄罪界（プルガトリオ）にあるのである。とは云え先ず己がすべての罪過を正直に認め真実に悔いし者のみが既にこちら側で〔此の世にて〕あらゆる痛ましき過去の追憶から完全に解放されるのである。

「此方に⑴これは罪の記憶を人より
除く力をもって降り、彼方には
凡ゆる善行の記憶を復する力をもって注ぐ。」（煉獄（プルガトリオ）28曲127～128）

⑴「これ」とは勿論レーテの流水のこと。

〔更につづいて〕

「ここにはレーテ、かくて向こう側には
エウノエと呼ばれる。また先ず此方
次いで彼方を味わねば効目なし。
これは他の凡ゆる味に優る。」（同右28曲129～132）

Beati, Vorum tecta, sunt peccata.（煉獄29曲3）

〔右訳〕〔「その愆をゆるされ罪をおおわれし者は福なり」（詩篇33・1）〕

「ただ河のみが私を距てた時」（煉獄29曲71）

「涙を注ぐ悔改の何の税もなしに
レーテを渡り、この糧を味わうは
神の高き定を破ることであるぞ」

「然し罪の糾弾が自らの頬より
破れ出でんか、我等の法廷にて
輪は自ら刃に逆らってめぐり⑵戻る。」（煉獄31曲40～42）

⑵「告白懺悔は神の忿怒を和らげ、正義の剣を鈍らす」と云うことは即ち審判がかかる場合あわれみにその処をゆずることになるからである。――訳者敷衍

「⑶彼女は⑷流れに私を咽喉まで
浸して己が後に率い
水の上を⑸梭のように軽らかに行った。
祝福されし堤に近づいた時

⑹Aspergesmeと、想い起こしも
尚更記しも能きぬほど、いと快く私は聞いた。

⑺美しき貴女は腕を開いて
わが頭を抱き、わが水を
呑むべき処を沈めた。
やがて引き出だして、浴びし私を」（煉獄31曲94～103）
――〔以上、神曲の訳文及び註、中山昌樹氏に依る〕

(3)　Beatrice(ベアトリーチェ)〔イタリヤ語よみ〕
(4)　レーテの流水
(5)　異本、長き衣、袈裟（stola）
(6)　「ヒソプをもて輪をきよめ給え、さらば我きよまらん。我をあらい給え、さらば我雪よりも白からん」（詩篇51・7）。
(7)　Beatrice。

## Lethe
## レーテ〔忘却の川〕

»Vergebung« ist ein Wort voll Huld;
Doch ist es nicht das letzte Wort:
Wir wollen nicht an unsre Schuld
Erinnert sein am Gnadenort.

Wir wollen die Erinnrung nicht
In unsres eignen Herzens Schrein;
Es soll in hellstem Sonnenlicht
Ein neues Leben nun gedeih'n.

Wir wollen die Erinnrung nicht
An das, was andre uns getan;
Der Mund, der von »Vergebung« spricht,
Klagt sonst im Herzen wieder an.

Wir wollen einen Himmel nicht,
In den das Erdendenken reicht;
Wir wollen einen Strom von Licht,
In dem der letzte Schatten bleicht.

「赦し」とは恩恵に充てる言なるぞ、
さはれ是れ最後の言にはあらず。
われらは願わじ　われらの罪を
恩恵の座にて憶え居らんとは。

我らは欲せず　おのが心の
聖龕(ずし)に追憶あらんとは。
いとも明るき陽光(ひあかり)のもと
新たなる生命(いのち)今や栄えよ。

われらは願わじ他人(あだびと)の我らに
なせしことを憶え居らんとは。
「赦し」に就いて語る口(あぎと)は
絶えず胸中(みぬち)に嘆くなり。

われらは願わじ、天つ国(みくに)に
地の思念(おもい)のおよばんことは。
われらは願う光の流れを、
最後の陰翳(かげ)も褪(あ)せにたる。

**12月9日**〔ジョン・ミルトン誕生の日、１６０８年〕

自分が自分で解したような基督の基督者を真面目に考えんと欲し、且つまた今日と雖もなお以前よりは確かに一層善く一層容易に、単純に善き人間の模範たり得るようなそういう模範たらんと欲する人がそもそも在るものだろうかと云う考えを抱くことがしばしばあるものである。

それには毫も非凡な天稟や教養を要しない、況して或る一定の外的地位などに於てをやである。反之、真の善き意志と真理への真実にして不断の追求とがあるならば、何人と雖も、然り樵夫も最善の牧師と同じく、必ずそのことを成し得、かくしてその隣人らに対して彼らの道に於ける光であることが出来る。

実際是れより本当のことはないのである。それで貴方が以上のように思うなら、あのダビデ王にその生涯のある決定的な時期に起こった事が幾分別な具合ではあるが、恐らく貴方にも起こるのです。即ち或る声が貴方に聞こえて来る。曰く

**「汝はその人なり」**〔**サムエル後書12・7**〕

と。然らば貴方は可能なりと思い、また同時に現代と自国民に必要であると考えることを為よ。貴方自身に比較的、価値のより僅少と思われることや多くの他の人々から充分期待され得る総ての他の目的を放棄せよ。

恐らくそれを知りもしないところの他人がそれをしなければならぬと云うわけがあろうか。そしてそれを認知するところの貴方がそれから免除されんと欲するのは何故であるか。――断じてそんなことがあってはならない。此の貴方の第一の義務をせよ、他のすべてを抛擲せよ、而して貴方のその義務を今日から果たせよ。

**12月10日**

神がその真実の僕らを如何に個人的に信じ給うかは、此くの如き〔真実なる僕らの〕一人の者が全国土の不幸を阻止し得るまでに大なるものである。斯くの如き不幸が避くべからざるものとならぬうちに、その人は先ず取り去られのである。そういう例証は稀ではない。最近の例としては、⑴ボーア戦争前の⑵カーライル、ゴルドン、スパージョン及びグラッドストーンの⑶死の如きがある。

**「義しき者仆るれど心にとむる人はなく、**
**愛しみ深き人々去りゆけど悟る者なし**
**義しき者の悪しき者の前より取り去らるるを。」（イザヤ57・1）〔私訳〕**

**「然れば視よ、我汝を汝の先祖等に帰せしめん、**
**汝は安全に墓に帰することをうべし、**
**汝はわがこの処にくだす諸々の災害を目に見ることあらじ」（列王下22・20）**

**「エホバ言い給いけるは、我為さんとすることを**
**アブラハムに隠すべけんや」（創世記18・17）**

〔なお、創世記第18章22節以下のエホバ対アブラハムの対話参照――訳者註〕

しかしかくの如き人々は彼らが神を愛するの故に、神に自由意志を以て永遠に僕として己れを捧げまつりし者のみである。出エジプト記第21章5、6節。

〔5**僕もし我わが主人と我が妻子を愛す我釋たるるを好まずと明白に言わば、**
6**その主人これを士師の所に携ゆき又戸あるいは戸柱の所につれゆくべし。**
**而して主人錐をもてかれの耳を刺しとおすべし。彼は何時までもこれに事うべきなり**」〕

その他の「神の僕」は決してかかる権威を有たない。

(1)南阿に於けるこのボーア戦争（1899～1902）は不義の植民地政策の現れである。英国の歴史を傷つけること大なるものと思う。

(2)Carlyle, Gordon, Spurgeon, Gladstone。

(3)最近、日本に於ける内村鑑三、藤井武、浜口雄幸、犬養毅等の死が神の聖旨に何ものか深きものあるを語らざるものであり得ようか。

**12月21日**

貴方等は基督教に於て、あなた方の好奇心や普通の知識欲を惹起せしむるものばかりを捜し出すようなことをしてはならない。また絶えず左様な「質問」をもって、良心の相談役や「魂の世話人」やその他の「権威者」といったような人々に訴えるようなことをせぬように注意せよ。斯くの如きことをなすならば、全き真理としての基督教の把握から直ちに遠ざかってしまう。そして斯くの如き場合に対して、既に詩篇第18篇が神に就いてこう言っている、曰く〔邦訳第26節〕

**「〔神は〕潔き者には潔き者となり、**
**僻む者には僻む者となり給う」**

と。神はなまはんかな気持では相手にし給わないのである。〔原文を直訳せば「神は弄ばれないのである」〕。只真実をもて神を求むる者にのみ神は答え給うのである。

**12月31日**

誰でも今後ひたすら正と善とに仕えんと固く決心したならば、しかもそれは別段そのための機会を捜すようなことをしないで機会があるように〔即ち、いつにても折にふれて〕、――かかる決心こそすべての「善き企図」の中で最も理に適えることであるのだが――そうしたならば斯かる人にとっては日も月も四季も年も、然り人生の終りに於ては彼の頗る多くの出来事すらも、彼にはどうでもいいこととなり、暦の如きは殆ど余計な家具の一つとなるのである。

〔かかる次第であって見れば〕時とは、活動（はたらき）ではなく特に歓楽（たのしみ）を期待している者にとってのみ価値と意義とを有するものであるにすぎない。

失望してはならぬ、貴方が今までとは別なものになろうと真剣であるならば、きっと時が来て(1)あらゆる人間的な智慧や教訓などの助けを要しなくなる。何となれば貴方は全くおのずから浄化された本性の自然的衝動と傾向から正にして善なることをつねに思いまた行うからである。

(1)「汝もしキリストと共に死にて此の世の小学を離れしならば、何ぞなお世に生ける者の如く人の誡命（いましめ）と教えとに循（したが）いて『捫（さわ）るな、味わうな、触（ふ）るな』と云う規（のり）の下にあるか。」（コロサイ2・20～21）。

「程遠からず宿る巡礼に
ひとしお嬉しく昇る輝きに
闇は既に四辺に逃げうせ、わが眠りも
これと共に去った。そこで大なる師等の
既に起きおるを見て私も起きた。
『多くの枝に人間の慾が
探りゆく甘き(2)果実が
けふ汝の飢を鎮（しず）めるであろう。』
私に向かい斯かる言葉をヴィルヂリオが用いたが
これに適（かな）う嬉しい賜物とてはない。
上に到らんとの意（おもい）に意が
私に来たので、一歩ごとに
身に羽が生えて飛ぶように覚えた。
階（きざはし）をすべて脚下に馳（は）せ了（お）えて
絶頂の段のうえに我等が到るや
ヴィルヂリオはその眼を私に注いで
云った(3)暫しの火と永久の火とを
汝は見終り、これより先俺自らの
識らざるところに汝は(4)来た。
俺は才と工とにて汝を此処に率いた。
これよりは汝の快楽（けらく）(5)を導者とせよ。
汝は(6)険しき道をいで、狭き道より出でた。
汝の顔を照らす太陽を彼処に見よ。
ここに(7)地のひとり自ら生ずる

若草、花また灌木を見よ、
(8)かの哭(な)いて俺を汝に来たらしめた
美しい眼の悦びつつ来る間
(9)汝は坐するもよし、その間歩むもよし。
(10)最早(もはや)わが言葉をも、わが相図をも俟つ勿れ。
(11)汝の判断は自由にして正しく且つ康(すこや)かである。
また己が意のままに做(な)さざるは咎である。
(12)されば俺は汝の上に王冠と法冠とを被らす。』」

（『煉獄』第27曲110～142）

――〔以上、中山昌樹氏訳註による〕

(2)「真の幸福の唯一の源泉たる最高善即ち神のこと。ダンテは今や地上楽園に入らんとす」
(3)「煉獄の火と地獄の火」
(4)「人間理性（ヴィルヂリオ）はこれ以上に進む能わず、神の天啓と恩寵（ベアトリーチェ）がこれよりダンテの導者たらざるべからず」
(5)「罪より浄められし霊魂は意のままに行動して矩(のり)を越ゆることなく、真直に神に向かいゆく」
(6)地獄と煉獄
(7)謙遜の象徴
(8)ベアトリーチェ
(9)「冥想するも活動するも可なり」
(10)道徳法則にしばられる要なく、この世の智に従うに及ばず。
(11)「霊魂が罪より出づる時その力潔く自由となる」ダンテ「饗宴」２・１。意志が真に自由なるを得たることを云う。第二のアダムによらざる意志は自由なる能わない。――訳者註。
(12)「神意が帝国と教会との二大制度によりて地上に実現さるべし」とはダンテの根本信念なりき。今やダンテは一切の罪悪より浄まれて宛らに神意を行う力を得たり。故にこの二大根本原理の表象たる王冠と法冠とを受くるなり。ダンテの抱負と自覚とを見よ。

**「16われ父に請わん、父は他に助主(たすけぬし)をあたえて、永遠に汝らと偕に居らしめ給うべし。17これは真理の御霊なり、世はこれを受くること能わず、これを見ず、また知らぬに因る。なんじらは之を知る、彼は汝らと偕に居り、また汝らの中に居給うべければなり。」（ヨハネ14・16～17）**

そのときには、神が貴方の為に自らなし給うた骨折りに対して神に感謝し、また目的を達した生涯のために神に感謝せよ。

さてそれでは貴方がそういう処へ到りつくまでお別れしよう、どうかそこに到りつくまで勇気をしっかり有たれよ。

〔これヒルティーがその読者我々に向かっての別れの言であると共に、深い同情をもって今も祈ってくれる心であると思う。

キリストを信ずる我々は既にそこに到りついて自由な歩みの中に生きている。しかし現実の我々自身の姿そのものはどこまでも罪びとであって、道徳に対して無力である。さればこそ我々も現実が現実として理想そのものである境域に至らんことをねがいつつ歩む。

基督者は死ぬまで罪びとであって、決してそれが義人となってゆくのではない。けれども基督者は信仰の故に義人である。キリストの故に神はかく（義人と）見なし給う。そして基督者の義人たる実は即ち聖化はこの信仰を出発点として漸進的に成長してゆくものであって、生まれつきの罪びとが浄化してゆくのではない。――訳者註〕

〔ヒルティーはこの『眠りなき夜のため』が読者に更に一言附加しているが、「眠りなき夜」に稀にしか遭わない我々には蛇足の様に響いてならない。そは我々はヒルティーの言字を感謝とアーメンとを以て読んで来たからである。我々にのこされたるはただその如く生きんとの意志あるのみである。「神我を助け給え」との祈りあるのみである。――訳者所感〕

# 「星のたより」（3）

（其４）「星辰の光」　ロングフェロー
（其５）「更に高く（エクセルシャー）」　ロングフェロー
残樅訳

〔文庫編集者註：「更に高く（エクセルシャー）」は著作集第８巻『詩歌集』／五、玉髄集（訳詩集）に一部改変されて転載されている〕

（其４）

## 「星辰の光」　ロングフェロー
## The Light of Stars. by Longfellow

The night is come, but not too soon;
And sinking silently,
All silently, the little moon
Drops down behind the sky.

There is no light in earth or heaven
But the cold light of stars;
And the first watch of night is given
To the red planet Mars.

Is it the tender star of love?
The star of love and dreams?
O no! from that blue tent above,
A hero's armor gleams.

And earnest thoughts within me rise,
When I behold afar,
Suspended in the evening skies,
The shield of that red star.

夜は来りぬ、ゆるやかに。
　しずけく沈む、
すべてが音もなく、小さき月は
　空の彼方に落ちてゆく。

地(ち)にも天(そら)にも光あるなし、
　ただあるは星辰の寂しき光。
夜のいやさきの守りには赤き
　遊星マースに与えられたり。

そは愛の優(いと)しき星か。
　愛と夢の星なるか。
あらず、上なる蒼き幕屋より
　勇士の物具(もののぐ)の光るなり。

厳かなる想い　わが衷に起こる、
　遥けく夕の空(そら)なかに
かかれる紅き星影の
　楯(たて)を望み見るときに。

O star of strength! I see thee stand
And smile upon my pain;
Thou beckonest with thy mailèd hand,
And I am strong again.

Within my breast there is no light
But the cold light of stars;
I give the first watch of the night
To the red planet Mars.

The star of the unconquered will,
He rises in my breast,
Serene, and resolute, and still,
And calm, and self-possessed.

And thou, too, whosoe'er thou art,
That readest this brief psalm,
As one by one thy hopes depart,
Be resolute and calm.

O fear not in a world like this,
And thou shalt know erelong,
Know how sublime a thing it is
To suffer and be strong.

おお力の星よ！　わが痛苦に向かい
　汝れの立ちて微笑むをわれは見る。
汝は鎧える手をもて摩く、
　斯くて我れは再び強し。

わが胸の中、光あるなし、
　ただあるは星辰の寂しき光。
われは与う　夜の始めの守りをば
　赤き遊星マースに。

打ち勝ち難き意志の星、
　彼れはわが胸に現る。
清らかに、堅く、静けく、
　和やかにまた　動きなく。

誰にてもあれ、汝れも亦、
　この小詩を繙く者は、
汝が望みややに消ゆるとき
　堅くして穏やかなれよ。

おお懼るるなかれ斯かる世を、
　程なく汝れも悟るめ、
如何に崇高きことかを知らめ、
　忍びて強くあることは。

――１９３２年12月30日――

(其5)

## 「更に高く」(エクセルシャー)　ロングフェロー
## EXCELSIOR　by Longfellow

| | |
|---|---|
| The shades of night were falling fast, | 夜の帳は速やかに降りぬ、 |
| As through an Alpine village passed | アルプスの村を若人一人過ぎゆく、 |
| A youth, who bore, 'mid snow and ice, | 雪また氷のさなかを小旗翳して |
| A banner with the strange device, | 奇しき金言はその上にあり、 |
| Excelsior! | 「更に高く(エクセルシャー)」ー. |
| | |
| His brow was sad; his eye beneath, | 彼の額はもの憂く、その眼は伏すとも、 |
| Flashed like a falchion from its sheath, | 鞘を払える鎌形の剣と閃き |
| And like a silver clarion rung | 白銀の喇叭と響くは |
| The accents of that unknown tongue, | 見知らぬ国語の調べ |
| Excelsior! | 「更に高く(エクセルシャー)」ー. |
| | |
| In happy homes he saw the light | 楽しき家々に彼は見たり |
| Of household fires gleam warm and bright; | 団欒の光暖かく輝かしきを。 |
| Above, the spectral glaciers shone, | 上には氷河の光さまざまに映ゆるよ、 |
| And from his lips escaped a groan, | 彼の唇を洩るる呻きは一つ、 |
| Excelsior! | 「更に高く(エクセルシャー)」ー. |
| | |
| "Try not the Pass!" the old man said; | 「この山路を越す勿れー.」老いたる人は言い出でぬ |
| "Dark lowers the tempest overhead, | 「上なる暴風は吹きおろさん、 |
| The roaring torrent is deep and wide!" | 狂う流水は深く広しー.」 |
| And loud that clarion voice replied, | 而もかの喇叭は声高く応えぬ、 |
| Excelsior! | 「更に高く(エクセルシャー)」ー. |
| | |
| "Oh stay," the maiden said, "and rest | 「やよ止まり給え」乙女は言えり「汝が疲れし |
| Thy weary head upon this breast! " | 頭をわが胸に休め給えかしー.」 |
| A tear stood in his bright blue eye, | 泪一つ浮びぬ空色に光る彼の眸に、 |
| But still he answered, with a sigh, | されどなおも彼は答えぜり、呻きつつ、 |
| Excelsior! | 「更に高く(エクセルシャー)」ー. |

ファイル名：PDF 小池羔　作成 2024/09/09　修正 2026/10/24　出力 2026/10/24
制作・著作：HP「小池辰雄文庫」

"Beware the pine-tree's withered branch!
Beware the awful avalanche!"
This was the peasant's last Good-night,
A voice replied, far up the height,
　Excelsior!

At break of day, as heavenward
The pious monks of Saint Bernard
Uttered the oft-repeated prayer,
A voice cried through the startled air,
　Excelsior!

A traveller, by the faithful hound,
Half-buried in the snow was found,
Still grasping in his hand of ice
That banner with the strange device,
　Excelsior!

There in the twilight cold and gray,
Lifeless, but beautiful, he lay,
And from the sky, serene and far,
A voice fell like a falling star,
　Excelsior!

「松が枝の萎え垂れたるを心せよ！
おそるべき雪崩に心せよ！」
農夫のこの挨拶は最後のものなりき。
声あり一つ、遥か高所より、
「更に高く（エクセルシャー）」！

夜明け頃、空に向け
聖ベルナルドの虔(つつま)しき修道僧が
祈祷(いのり)を繰返し言いしとき、
声一つ叫びぬ、大気を震わせて
「更に高く（エクセルシャー）」！

一人の旅人の雪中に半(なかば)埋もれるを
その忠信なる犬は見出だしぬ。
凍(こお)れるその手は尚も握れり
かの奇しき金言の小旗を、
「更に高く（エクセルシャー）」！

寒く小暗きあけぼのの空の下
息絶えぬれどなお美しく彼は臥せしなり、
澄みて遥けき空よりは
声一つ響く、流星の隕つる如くに、
「更に高く（エクセルシャー）」！

――１９３３年12月30日――

〔真理を追い求めてやまざる精神、青年の意気、須らく斯くあるべし。斃れて而して後已まんのみ！〕――訳者所感

# 「樅の日記」（3）

## ――1918年11月30日～12月10日――

小池政美

〔　〕は編者の註

### ○1918年11月30日（土）

学校へ行って見ると財政も外交史もお休みであった。西片町へ行って見たが正ちゃんは未だ帰らないので植物園を十拳君と一緒に散歩する。久し振りで歩むこの域は慕わしい思い出を多く蔵する。千駄ヶ谷に居た頃、青木へ遊びに来て此処へも来た事や仮林〔？〕の事や、土龍の事や、思えば皆十年から五年前へかけての事である。高等学校へ来てからは或いは今日が最初かも知れない。そうそう附属〔中学〕を出た時来た事を覚えている。高い天を名も知れぬ樹木の梢に仰いでお弁当を開く。△△先生の噂などしきりに出る。○○先生からのお話を十拳君が伝えて呉れたのであるが、○○先生が学生時代に見られたところに依れば、当時○○先生の下級に居られた△△先生は大変過激な思想の人で、社会主義になりはしないかと思われた相である。しかし誰にも意外な事には今の先生の憲法論がどういう訳か出来上がったのである。そしてなお不思議な事には△△先生の言行にはどうも是があの憲法論の著者の言行かと思われる節がある。何時までこの態度を続けてゆき得るか、△△先生の学者的良心を奇妙に思う、と云う様な意見であった相である。

こういう話を聞くと、いつか何とか会で△△先生が酔われた揚句、△△が馬鹿になって居るから諸君も呑気にして居られるんだぞ、と云われたと云う話など思い出されて、何となく辻褄が合う様な気がする。お気の毒なと云う様な気もするが同時に思うがままに振るまわれたらと云う遺憾もある。

12時少し過ぎ、西片町へ行き、今日は玉川の彼岸を歩こうと云う事になる。下布田の地図を忘れていたので大いに弱る。長い静かな道を歩きに歩いて調布の手前の北浦の停留場へ着いた頃にはすっかり秋の日は暮れ果てて星が美しく輝いて居た。登戸の渡しに立って暮れ富士と静かな流れを見た時もよかったが、低い森に地平線を限られた畑の中でこの幾万の天なる星を眺めた時は更によかった。

戸隠の夜、沼津の夜、武蔵野の夜、何れも静寂の大いなる胸を見せて呉れた。

今夜は同室会が豊国であったのであるが、僕はなしなけの金の中から肉を食うために三円を出す事が惜しかったので欠席にする。その代りにこの前の土曜に訪問しようと思ってしそこなった岩瀬〔信仰の友、兄より半年後、同じ病に斃れて、聖国へ行かれた。臨終にて「小池君のところへ行く」と云われた由。親切な人であった。兄の訃報が北京から来る二、三日前、心配して僕を訪ねて慰めて下さったのも彼であった。〕を問わうとした所が、多摩川から帰って来ると、

クリスマスの用意は出来上がったが、今晩教会覚醒の若き会があるから来ないかと云う葉書が来ている。又あの教会の他の人等と関係の出来る事をおそれて、電話で断る。断りの電話のために武田へ上がったのは八時であった。何となくうら寒い夜であった。お湯上がりの御身体を二時間をおば様は僕のために割いて下さった。二階の日本間の座敷に座して静かにお話を伺うと僕の心も隠（ひそか）におさまる。若しおば様が僕をあんかの如く心得らるるなら、おば様は僕のためには一杯のソーダ水たるを失わない。まぁそんな譫談はやめにしてとにかくあのお座敷でお話を伺うことが出来たのはよき土曜の晩として、相応しき最後の二時間であった。僕は或はと用意して行った日記を出して今月の10日、11日頃の旅行の終りの部分の日記を読む。聞いていただいたので始めてこの間中からの積任が果たされた様に思われた。ほんとうに11月はよき月であった。一春一夏の収穫時であると同時に来る可き冬の準備期であった。よき努力の春と夏とを持ち得たと同時に、よき秋を恵まれた事を忘れる事は出来ない。わけておば様にはお世話になった。お礼をよく申して帰る。

## ○1918年12月1日（日）

幾年か前の今夜は――たしか一高二年の冬の様に思われる――僕が和協楽堂で救世軍の士官候補生 ×× 氏にとっつかまって、〔押し売り式であったのだろう〕よぎなく救世軍を斥け、彼をして不快の面持ちをなさしめた日であった。その時僕は聖心女子学院の荘厳なるマス〔集まり〕を見せられた後であったので、僕の是認すべきは〔むしろ〕救世軍たるを得なかった、〔が〕今はそういう只一面の言わばクリストと一面識の関係に於てでなく、救世軍を見捨てれば見捨てる程、彼御自身に近づこうとして居る身である。顧みて知らぬ中に歩んで来た路を感謝する念に打たれざるを得ない。

今朝は□□さんの弥生町から曙町への引越しを手伝う。大変な荷物であった。まぁ八分まで片づいてお昼のお膳につき得たのは一時頃であったか。□□さんは□□さんの感激があったらしく、しきりに新たなる生活に御恵慈（みめぐみしげ）からん事を祈っていた。戸隠の八週間、戸隠を去らんとした時のその前夜の心地を思い出すことしきりであった〔兄自身のこと〕。

錦町へ廻る。〔――以下内村先生の御講演を聴いて〕

今日はアモス書中、第1章第2章の研究であった。

アモスはテコアの牧者である。彼は富者に非ず、権者に非ず、又羊の所有者に非ずして、羊を牧（か）う者の一人であった。アモス自身も言う、

「14 **アモス対（こた）えてアマジヤに言いけるは、我は預言者に非ず、また預言者の子にも非ず、我は牧者なり、桑の樹を作る者なりと。15 然るにエホバ羊に従う所より我を取り往きて我民イスラエルに預言せよとエホバわれに宣（のたま）えり」**（アモス7・14～15）

と。この一野人は単に信仰あるの故を以て神命なるの一事を以てテコアを出でて王の聖所

王の宮なるエルサレムに行き大胆に智と侈とを以て奢る其処の市民、官吏、王に呼わって言う。

「3 **エホバかく言いたもう。ダマスコは三の罪あり、四の罪あれば我かならず之を罰して赦さじ。即ち彼らは……」（アモス1・3～5）**

ダマスコの関は天下の要害である。今日のジブロータルの如きものか。若し、ジブロータルは陥つべし、と云うとき世の人は信ずるであろうか。アモスは正に之を喝破したのであった。ダマスコの次にガザを責め、ツロを責め、エドムを責め、アンモンを責め、モアブを責め、ユダを責めた。エルサレムの四方の国々は悉く責められ、悉く歴史的事実を以て、神の智と力とによる罪に対する罰なりとした。エルサレムの市民嘲や快哉を叫び、アモス万歳を称えたであろう。しかしながら、アモスが羊の群と別れてエルサレムへ来た所以のものは、決してアモス万歳を呼ばれ、エルサレム万歳を称えしめんがためでは無かった。彼の来たのはエルサレムそのものを責めんためであった。この故に彼は言う、我が来たりしは、エルサレムよ、汝をして汝の仇敵の倒壊に快哉を呼ばしめんがためでは無い。ダマスコを亡ぼし、ツロを破り、最後にユダヤを責め給いし神はまたエルサレムを責めざるを得ないのであるぞ。エルサレムに多くの罪なしとする事を得るか。更に大いなる罪を犯しし事なきか。汝等は義者を金のために売り、貧者を鞋一足のために売らなかったか、弱者と見れば、その頭の塵一本さえも、貪らんとするは汝らではないか。柔和な者を苦しむるは汝の所業ではないか。父子二人一人の女の許へ通うは誰であるか。質物を押領し、罰金を私消して神前に宴をなすは誰であるか（アモス2・6～8）。

若しダマスコ、ツロ、アンモン、エドムが神に亡ぼされし事を是認するならば、この次は汝等の番であるぞ。汝らは我が力を疑うか。高きアモリ人を亡ぼし（2・9）、また弱き汝等をかつてエジプトより助けおこせし我が力を忘れたのであるか（2・10）、私は汝らを必ず亡ぼす（2・11～16）とエホバは言い給うのである。

我らは英仏を破れり、唯英仏吾等に服するのみといいし独乙人黙せよ。独乙にも英国にも仏国にも米国にも日本にも国家的罪悪はある。国家的刑罰来らざるを得ない。

123年以前、１７９５年終にポーランドを分割し終りし露（ロシア）、墺（オーストリア）、普（プロイセン）が今日に至って敵味方に分かれて戦い、攻守五年、欧州の三大国、世界の三大帝王国と人にも許され、自らも赦したものが、悉く忽ちにして倒れ去ったことを思え。英国汝に三つ罪あり、四つの罪なきや、米国汝になきや、日本汝になきや。我らは卿等を、殊に日本を愛するが故にこの心配なきを得ない。どうしたらよいのであるか。アモス書9章末段は之を語る。〔以上〕

「地人論」を買い、□□さん二人で紅茶を飲み、クリスマスには□□さんはガブリエル・マックスの「クライスト」を僕に、僕は感想十年を□□さんに贈る可き事を約して、数歩の後別れる。よき日曜日であった。

〔中間の数日ここに略す〕

○1918年12月6日（金）

午前中、附属にて追悼会通知〔大関先生の〕の表記書に忙殺、午後図書館にて会社法勉強。○○先生へ電話をかけたけれどもお留守。夜青木にて。お出来〔フルンケルのこと〕漸く万幕終了。

○○が少ししょげていた事を気の毒に思う。コレリッヂの言う通り、一人の人の問題は僕には一つの宇宙問題になって来た。一生懸命考えるけれども、どうも手段のつかないのに困る。

○1918年12月7日（土）

朝急いで武田へ、〔S〕先生への電話をさしあげるつもりで行く。……

9時に「財政」終る。

正ちゃんに会おうとして行くと、今日は御△事がある事を忘れて、お約束をしてすまなかったという断り。

十拳君と新宿から井ノ頭まで歩く。カントを読まねばならぬ。善悪に余程迷っていられるよう。出来ることなら何とかしてあげたいけれども、二人とも思うのであるが、問題は末に走せすぎているらしい。

夜は美しい星であった。

○1918年12月8日（日）

好き日曜であった。クリスマスに近づきつつある今日として、誠に好き日であった。一日清き思いの益々清からざるべからざるを思わしめられた主の聖日であった。

朝快く覚める。光久さんの筑紫の極までの御土産にと神田明神まで納豆をとりに行く。午前は思いもつかぬ間に溜まっていた過去一週間の日記をつけ、入浴する。額の腫物は凡て全快に近い。

一時本所の○○○○○○製造株式会社へ行く。○○○○○と△△△△△との合併契約及びこれがための総会のためにである。僕は消滅合併でなく有続合併と伺っていたから合併後の資本金は△△△△△円と思っていた。すっかり思い込んでいた丈に△△△△△円は△△△△△△円の半額払込の株によって出来るのであると聞いた時には驚いた。僕の知らぬ事情もあるのであろうけれども、僕は終身△△△にはなりたくない。愉快の少ない仕事である。

……すぐ美土代町へ行く。

今日はクリスマス準備講演、イエスの系図。

馬太伝第1章、路加第3章の研究であった。

（1）イエス・キリストの系図と唱うるものに二つある。一はマタイ伝第1章で、他はルカ伝第3章である。二つを比ぶるときに、単にその順序が異なるのみでなく人名にも差がある。二つの系図は二つのものでなくてはならぬ。近来の定説はマタイ伝はヨセフの系図であり、ルカ伝はマリヤの系図であるという事になる。

（2）イエスを生みし母のマリヤなることは疑う可くもない。マタイ之を伝え、ルカ之を伝う。マリヤが処女であったこと、これまた信者として聖書全部神言説を採るもの、かくあらねばならぬとなす重大なる事実の一つである。然るにかかわらず何が故にイエス・キリストの系図を顕するマタイ伝1章はその15節にヨセフを入れるか、これ大いなる問題であり疑問である。疑問であると同時にこれがまたクリスト教の一つの鍵である。クリスト教は単一なる個人の頭脳裏に生まれた冥想ではない。これは歴史を大いなるファクターとしてその背後に持つ。神がアブラハムとダビデとに大いなる約束をなし給いし以上、必ずその約束を成就せしむる者はアブラハム、ダビデの後裔（こうえい）より出でねばならない。単なる被造物とは異ならねばならない。

（3）日本訳のアブラハムの裔（すえ）なるダビデの裔イエスは、独逸訳の

Dies ist das Buch von der Geburt Jesu Christi, der da ist ein Sohn Davids, des Sohnes Abrahams.

と共に悪い。アブラハムの裔なるイエス、ダビデの裔なるイエスである可きである。改訳のアブラハムの裔、ダビデの裔イエスといい、英訳の

The Book of generation of Jesus Christ, the sun of Davd, the sun of Abraham.

と云うは稍（やや）正確に近い。

（4）裔（すえ）は子である。親の性質をうけたるものである。親に対する神の約を履する可きものである。ダビデがアブラハムに対する神約の実現者ではないのである。アブラハムとダビデとに約し給える大いなる約束の実現者はイエスであるのである。創世記12章、撒母耳（サムエル）後書7章の神約の実現者はアブラハムの裔でもあり、ダビデの裔でもなければならぬ。かくの如きイエスの系図である。

（5）系図とは何であるか。日本訳改訳ラゲ訳、皆、系図という、英訳は The Book of generation といい、独訳は Dies ist das Buch von der Geburt Jesu Christi という。ラテン訳は Liber generationis Jesu Christi,(filii Davidis, filii Abrahami) である。新約の創世記である。新約の創世記は二義を含む、一は系図である（14節まで）。二は誕生記である（3章まで）。三は一代記（マタイ伝全体）である。三義とも同時に含まれているのである。

（6）タマル。ラハブ。ルツ。ウリヤの妻。

（7）アブラハム―ダビデ、ダビデ―バビロン、バビロン―ヨセフ。一は庶民期である。二は国王期である。三は貧民期である。国王期にソロモンは出でたけれども、イエスは生まれなかった。三は天の数。七の二倍。

（8）神の恵みの深く深く段々各の人を通して各の家が恵まれ、段々世は聖化するとも最後の一段は神の御手を必ず要する。イエスはヨセフまで歴代信仰の家に生まれた事はヨセフの先祖の名は「ヨ」のつきしもの多きにより知る事が出来るが、それだけでは救世の人を生むことは出来なかった。最後には神の独子イエスを処女マリアを通して歴史的に吾等の中に住まわし給うた。エホバがアブラハムに、

「1**爰にエホバ、アブラムに言いたまいけるは汝の国を出で汝の親族に別れ汝の父の家を離れて我が汝に示さん其地に至れ。2我汝を大なる国民と成し汝を祝み汝の名を大ならしめん。汝は祉福の基となるべし。3我は汝を祝する者を祝し汝を詛う者を詛わん。天下の諸の宗族汝によりて祝福を獲んと**」（創世記12・1～3）

と約し給いしその成功のためには最後にキリストの初臨を要したのである。

エホバがダビデに、

「11……**エホバ汝に告ぐエホバ汝のために家をたてん。12汝の日の満ちて汝が汝の父祖等と共に寝らん時に我汝の身より出る汝の種子を汝の後にたてて其国を堅うせん。13彼わが名のために家を建てん、我永く其国の位を堅うせん。14我はかれの父となり彼はわが子となるべし。彼もし迷わば我人の杖と人の子の鞭を以て之を懲さん。15されど我の恩恵はわが汝のまえより除きしサウルより離れたるごとくに彼よりは離るることあらじ。16汝の家と汝の国は汝のまえに永く保つべし。汝の位は永く堅うせらるべし。**」（サムエル後書7・11～16）

と約し給いし事の成就のためには、彼の再臨を要す可きである。クリスマスを祝う事はまた再臨を希う心であらねばならぬ。

（9）我等もベイビー・クリスマス（Baby Xmas）を去って大人の生誕節を迎えん哉。また、小児のクリストを可愛い赤さん視するを去りなん哉。――以上

早くガブリエル・マックスが欲しい。

……

Hにあったので○○の事をたしかめると驚いたことには全然無根であった。

夜、本郷まで母様と辰さんと三人で散歩をする。

出久さん退寮。

## ○1918年12月9日（月）

寒い日であった。朝学校へ行く道も寒く、時間と時間との間は葉づたいの風を受けるのも寒く、帰り途も寒くあった。殊に風に吹かれて大路を歩いて後の気持は又別である。

……

法理は益々愉快になる。Neukantianer〔新カント派〕に入る。Rückkehr zu Kant!〔カントに帰れ！〕という何となく慕わしい名を、命題をまた聞いた。牧野先生に伺ってから既に二年はたっていた。

麻布の帰りに九段下で Bergson:Introdaction to metaphysics〔ベルグソン「哲学入門」〕を捜す。それはなかったけれども、独逸訳を買う事が出来た。昨日の Andersen: Improvisator〔即興詩人〕と言い、今日の "Einführung in die Metaphysik"〔哲学入門〕と云い、本を侶(とも)とし、本を愛する者にとっては嬉しき事ばかりである。

武田による。六時から八時まで、おば様からお話を伺う。夜、石坂先生の雄筆に接する。

## 〇1918年12月10日（火）

今日も寒い、外が寒いと内は馬鹿に火を燃(た)くので図書館はたまらなく苦しい。教室は煙草の不潔で一杯である。外の寒さの方がどんなに快いか判りやしない。

朝九時四十五分、Kさんを東京駅に送る。……御機嫌よう、お大切に。……

法窗夜話を一寸のぞく。グローチウス夫人、オースティン夫人の話に感心する。しかも彼等の信仰に一目をも与えぬH先生、O先生の心理を不思議に思う。

ねむい午後を三時間教室に暮らし、公孫樹(いちょう)の梢に七日の月と夕暮の美しい色とを望みつつ本郷を後にする。学生の生活も段々暮れて行く。今の間今の間と云う声を聞く。いつまでも超塵越俗であらねばならない。〔アーメン〕

夜また、石坂先生の雄渾な文章に接する。日本民法中巻終る。明日は下巻八百頁を読まん哉。Improvisator も楽しみ。Mill on the Floss も面白い。Paulsen（パウルゼン）と Bergson（ベルグソン）とが机の一隅にある。今正に秋(とき)なるを覚ゆる。

# 「先生去りて一年半の日に」

開会に際しての一言――「藤井武君記念講演会」に於て

１９３１年11月14日
司会　小池辰雄

開会に当たりまして一言申上げます。

皆様！　昨年、１９３０年は我々にとってどんな年でございましたろうか。少なくとも二つの出来事がございました。申すまでもなく、春三月には内村先生が召され、真夏には藤井先生が逝かれたのであります。一が落日の如くでありましたならば、他は雲にかくる陽の如く見えなくなったのであります。何れにせよ、先生方はこの地上から事実上見えざる世界に移られたのであります。これは小さな事でありましょうか。キリストが

**「汝らは世の光なり」**

と申されたその「世の光」の中のいとも大なる二つが相前後して失せたのでございます。

「牧人の牧場は嘆き、カルメルの嶺は枯る！」

とは誰あろうエホバの嘆き給いしところでありました。武蔵野の野と富士の高峯とは無言の哀愁を吹息いているではありませんか。

今日はその若き預言者が召されましてから、正に半年の日にあたるのであります。それ故この記念講演会が開かれることになったのでございます。茲にその戦友であられる先生方が立たれた次第でございます。

バビロンは煌々たる燭火に眩くありますが、生命の光に乏しくあります。パンに乏しいの何のと申しましても、神による言の乏しきに至っては、正に飢饉ではございませんか。ここには上よりの真理が説かれると信じます。露のおくが如くであるか、暴風雨の襲うが如くであるかは聖旨のままであります。我々は膝を折らずして水を掬みしかの三百人の如き心根を以て真理を喰らおうではありませんか。若しそうでありませんならば講演会は禍であります。天に在る先生の心を所謂記念会なるものを以て痛めしめたくありません。

戸外には星々が輝いて居ります。ダニエル書のあの一句を想います。

**「衆多の人を義しきに導ける者は**
**星の如くなりて永遠にいたらん。」（ダニエル12・3）**

この会によってもまた栄光は神に帰せられんことを。

今晩がまた真理への堅き一歩にてあらんことを。

〔附記〕

**藤井武君記念講演会**　（司会者　小池辰雄）

1．日時　１９３１年11月14日（水）午後正6時半

2．場所　市政講堂（日比谷公園内日比谷公会堂地下室）
3．講演
「真理の敵」　矢内原忠雄
「藤井君と日本」　金澤恒雄
「クリスチャンフレンドシップ」　塚本虎二
主催　講師一同

＊

## 「雁が音」（1）

残樅

（其1）Departure near!（離別（わかれ）は近し）
（其2）In Him.（彼にありて）
（其3）希望

＊

（其1）

### Departure near!（離別は近し）

Your hearty letters on my table lie,
　Your daily prayers come to help me nigh,
'Twas two years ago that we met,
　Now's the time to part, it is said.
Many a sweet memory have we had,
　Into a strong cord weaving joy and sad,
　　Departure near,
　　My brother dear!
Let us see the setting sun
　On the promise it may rise;
Let us praise the Eternal Son:
　All in Spirit we realize.

——１９２８年（昭和３年）１月８日、佐藤勲兄の米澤赴任を聞きて。

（其2）

**In Him.（彼にありて）**

O my brother, gone in youth!
　By His hand thou fought alone.
O my brother, man of truth!
　On thy cross thy hopes forlorn.
Many a night thou must have wept,
　But thy heart was strongly kept;
Pure and earnest was thy all.
　So should be my heart and soul,
I would stand in faith secure,
　Be my trouble what it may;
In His love our truth is sure.
　He's the Power on my way,
Where nobody for me stands,
　When my spirit bleeds in sands.

――１９３０年10月24日、地には亡き兄を想いつつキリストへの信頼へ。

＊

（其3）

**「希望」**

１９２９年２月20日
――原作に加筆せり

日は去り月は移り行く哉！
　我は聞く虚しき人言の迫り来たるを、
　何者ぞ、われをその弱きに窺うは。
縦え暗雲低迷して脅かすとも
　希望の子は暗澹の巷に倒れず、
　常住の星を雲貫きて見る。
縦え今は森の小径を辿るとも、
　荊棘の絡むありて傷くとも、

活路ありて澄明の空の下に至るべし。
逆風には逆風の真理を学ばん、
　時ありて順風吹かば真帆を揚げん、
　此れには驕らず、彼れには撓(ひる)むなけん。
現実をいつわりなく直視し、
　現象の背後内奥に真理を
　直観してわれは確く歩むべし。
真実は吾人に希望の翼を付与す、
　信仰は我れに飛翔の力を授く、
　さらばわが魂よ碧空高く飛ばん哉！
信仰よ！　汝はわが無二の友なり、
　自然よ、汝はこの友の衣なり、
　真実よ、永遠(とこしえ)に我れ自らたれよ！
ああ、われは今往きなやむなり、
　われ何れ(いず)の途(みち)を行かばわがために
　神の定め給うわが伴侶(とも)にあうべきか。
それとも吾れには伴侶(とも)なきか、
　何れにてもあれわが心ひたぶるに
　真理を求めなば道あらん。
聴け、天来の言、永劫の語、
「吾れは道なり、真理なり、生命なり」。
然り、羔(こひつじ)の日こそわがいやはての希望(のぞみ)なれ！

＊

**詩篇第145篇**

**3 エホバは大(おおい)にましませば最(いと)もほむべきかな、その大なることは尋ねしることかたし。**
**13 なんじの国はとこしえの国なり、なんじの政治(まつりごと)はよろず代にたゆることなし。**
**14 エホバはすべて倒れんとする者をささえ、かがむものを直くたたしめたもう。**
**17 エホバはそのすべての途にただしく、そのすべての作為(みわざ)にめぐみふかし。**
**18 すべてエホバをよぶもの　誠をもて之をよぶものに　エホバは近くましますなり。**

19 エホバは己をおそるるものの願望（ねがい）をみちたらしめ、その号呼（さけび）をききて之をすくいたもう。
21 わが口はエホバの頌美（ほまれ）をかたり、よろずの民は世々かぎりなくそのきよき名（みな）をほめまつるべし

――１９３２年12月21日
１９３２年１月13日払暁　脱稿

〔参考〕

## IN CHRIST 「キリストに在って」

Autumn 1951　Tatsuo Koike　１９５１年秋 彼岸（小池辰雄）

O My brother, gone in youth !
Ever in Christ thou fought alone,
On thy cross thy hopes forlorn,
Trusting thou in Father's truth.

Pure and earnest was thy love,
Some dark nights thou must have wept,
But thy heart was strongly kept ;
Such a soul I wish to have.

Be my battle what it may ;
For me the Spirit light shall be,
And then I march in graceful right.

Christ's the Power on my way ;
And broken hearts are friend for me.
For you in Christ I pray by night.

噫、わが兄、若くして汝は去った！
独り易らずキリストに在って戦った。
希望を棄てて、十字架を汝は負った、
父神（ちち）の信誠（まこと）に信頼しつつ。

汝の愛は純でまた熱かった。
幾夜かの汝の涙を誰が知ろう。
されど汝の心は雄々しく不動。
あのような魂で私もありたい。

私の戦（いくさ）は何であろうと、
聖霊（みたま）は私の光であり給う、
かくて恩恵（めぐみ）の義にあって私は進む。

私の路の力はキリスト。
砕けた心は私の友よ、君らのために
キリストに在って夜ごとに祈る。

〔文庫編者註〕著作集第８巻『詩歌集』から転載
（「曠野の愛」誌第９号、小池政美召天三十周年記念号所載）